

会員の高齢化に伴い、この会もいよいよ終りかと思うほど人数が減っていたが、令和の元号を得て、これからも細々と続けていけそうなのが、何より嬉しい。

中西進先生、中川りゅう先生、万歳である。

万葉集の魅力は、単なる歌集ではないことである。古来多くの人が語っているように、天皇の御歌から名もなき防人の人たちの繰り言まで、実にさまざまな歌が収録されていることである。

私は、和歌は詠まないし詠めないのだが、万葉集の歌には何故か惹かれる。

万葉集は伴家持が次第に勢力を失っていく伴家を憂いて編んだ歌集であり、役職を利用して歌を集めたと言われる私家版でもある。

ここに収録された四千五百首の歌から、その歴史的背景を知ることができるのが、なんと言っても、もう一つの魅力でもある。

それに、現在でも読まれている物語の原型が多くあるの、も見逃せない。

例えば、浦島太郎伝説。竹取物語の原型。七夕の歌、一人の乙女を二人の男が愛した悲恋物など多くの歌物語である。

万葉集を読むまでは、それらの物語の根がここにあるなど知りもしなかったが、これらの長歌を詠んだ時には、思わずニヤ

リと口元がゆるんだ。

元々、好きで始めた万葉集ではなかった。人数合わせのために声をかけられて入会したので、初めのうちはチンプンカンブン。まして万葉仮名と称する漢字には、ただ「へえー、凄いなあ」と古代人に感心するだけだった。

でも、継続するということは凄いいことだ。チンプンカンブンから始めても、月日が経つうちに、次第に理解ができるようになってきていた。

「令和」と発表された時、梅花の宴の歌をすぐ探しだし、共に学ぶ友人たちと喜びを分かち合うことができた。

改めて大伴旅人や山上憶良の歌に、まるで一緒に宴に参加しているような、隣のおじいさん

のような親しみを覚えたのだ。四日市では久留倍遺跡が発掘され、歴代天皇の足跡にも触れられるようになった。

日本史上初めての戦争と言われる壬申の乱についても、万葉集の歌から史実を読みとることができるのも、面白い。

初めは分からなくても、続けることで次第に理解が深くなることもあると、三十年を経て実感した。加えて、一冊の本を長く読み続けることで、より深く本読みの醍醐味を知ることができたのは、まさしく令和のおかげである。

倦まずたゆまず長く続けていれば、いつかこんな日も来るのだと、なんだか嬉しい気持ちが続いている。

《一般成人の部》優秀賞

地元の偉人を私に知らしめた一冊

東への鉄路―近鉄創世記(木本次次)読んで

鷲尾 裕 二

私は生まれも育ちも四日市である。しかしながら、市民には身近な近鉄の線路の桑名駅から江戸橋駅間が、もともとは三重県民の手で作られていることを「東への鉄路―近鉄創世記」木

本本次著を読むまで、恥ずかしながら知らなかった。また、鉄道会社運営を行い、社長、取締役、監査役を兼務する会社が合計三十七社に及び、四日市に図書館を寄付し、更に

は歌まで詠む実業家がいたことも、これまた知らなかった。

その実業家の名は熊澤一衛。四日市市河原田町で生まれ、現在の津高等学校を卒業、静岡で実業家として名を馳せる。そしてこの四日市へ縁あって舞い

戻り、伊勢電鉄の社長、四日市銀行の頭取と務めてからの大正の終わりから昭和の初期のお話、載っている。

この本は、そんな郷土の偉人が活躍する物語……ではなく、近鉄が参宮急行と名乗っていたその草創期、伊勢までの線路をのぼすべく奮闘するなか、ライ

バルの伊勢電鉄の社長として立ちあがり、そして、近鉄に敗れてしまふ、という勝者側から書かれた物語である。

その物語では「お伊勢さんへ行く鉄道を大阪モンに独占させるわけには行かない」との想いから、桑名・津間の路線を、名古屋へ路線を伸ばすよりも、南下させ伊勢まで到達させることを優先させた。津市内・松阪市内で「近鉄道路」として残っているのがその伊勢電鉄の名残である。

近鉄は、熊澤に「共同で名古屋へ鉄道を引かないか」と秋波を送るのであるが、そのラブコールを袖にした。三重県人の本懐を見せてやる、との意気込みが感じられ、大阪モンにお伊勢さんへの鉄道を独占させてたまるかと、あくまで伊勢への鉄路にこだわった熊澤の気持ちは

いかばかりだったのか。

このお話はあくまで近鉄側の物語であり、熊澤のことは詳細には書かれていないが想像にあまりある。

だが、伊勢までの鉄道輸送は、国鉄、近鉄、そして熊澤の伊勢電鉄と三本もの輸送供給に対応する需要はなく、その結果、熊澤の伊勢電鉄は早々に経営危機に陥ってしまった。さらには熊澤の不運は続き、疑獄事件に巻き込まれ逮捕されてしまふ。

そして名古屋への路線は熊澤の伊勢電鉄ではなく、昭和十三年に近鉄が主力となって完成されたのである。

このような歴史に埋もれてしまった地域の偉人にまつわる歴史旅行をさせてくれた一冊がこの本である。

四日市市立図書館の入口の熊澤一衛のレリーフはそんな歴史を知ってか知らずか、やや厳しい顔で来館者の姿を見つめている。そしてその姿を見るたび、私はこの「東海の飛將軍」と呼ばれた地元の実業家のお話をいつか書いてみたいと思うのである。



審査講評

読書体験と実体験

国府正昭

今年の読書エッセイコンクール

の応募数は、前年よりもやや増えて合計一〇九作品であった。総数の増減は、主に中学生の応募状況による。かつては一校で一〇〇を超える数の作品が複数の中学校から寄せられた年もあったが、近年は校内選考をしていただいてるようで、数的にも落ち着いてきたし、作品の質も一定の水準以上のものがほとんどで、選者として大変うれしく思っている。生徒・児童を指導し応募の手間を担って下さっている先生方のご苦労には心から感謝申し上げたい。

まず小学生の部であるが、細川奨真さんの「犬たちをおくる日」が、捨てられ殺処分される犬のことを扱った本をきちんと読みこなした上で、毎日の日常を振り返り自分の考えをしっかりと書いていたのが最優秀賞とした。本の中で読み取ったことを日々の生活に戻して考えてみたり、現実の世界と結びつけて考えてみたりすることは大切な姿勢だと思う。片野拓実さんの作品もやはり読書の体験と亡き祖父の面影を重ねていて、しみりとした味があった。佐野隼さんは、まだ小学校の一年生なのに充実した内容で感心した。藤田萌生さんは普通の「感想文」ではなく独特な視点で書き切った点を

大いに評価したい。

中学生の部では、寺西乃絵さんの「私の開拓本」を最優秀とした。ミステリーという分野を新しく知ったワクワク感が伝わってくるし、そこに目を開かせてくれた本を開拓使ならぬ「開拓本」としたところがおもしろかった。木村好花さんは本棚への「本の置き方」で原稿用紙三枚を書き切った。読書感想文になりがちな中学生の中で、その自由な論点の設定が評価できる。名和佑花さんの作品は素直な書きぶりが良かった。高橋朋子さんは、「読む」人々を撮影した写真集を題材にして書いた、その着眼点をおもしろく思った。

成人の部はいつものように様々な視点からの興味深い文章が多く、学ぶことも多かった。そんな中で、谷口訓子さんの「若者よ、ぜひ『鳳仙花のうた』をよんで！」に大変感心したので最優秀賞に選んだ。在日韓国人歌人李正子の歌集を読んだ体験と、自らの教え子であった韓国籍生徒M君の死とを重ねて綴り、胸に迫るものがあった。また、松本康さんの「『浮世の画家』と『國之楯』」もしっかりと内容だった。テレビで見た「國之楯」という戦争画から、カズオ・イシグロの小説へと話を繋げ、芸術と戦争の関わりを考察し

ている。この二作は悪化する日韓関係や緊張する国際情勢など現今の世情に対する懸念が根底にあって書かれているわけだが、本で読んだことを現実の世界での自分の体験や見聞と結びつけてとらえていく姿勢は大切なことだと思われる。奥田かなえさんの作品は継続することの大切さを改めて教えて

再会と新しい出会いと

中山みどり

長く選にたずさわってきたことで、たくさんさんの哀歓を味わっています。不思議と過去の作品や、時には筆者のことまで思い出したりして、応募してきた人はどうしているだろうと思うこともありま

す。また、新しい出会いに感動しながら、再会を待つ気持ちも。

小学生の部の最優秀賞に選んだのは、細川奨真さんの「犬たちをおくる日」でした。彼自身も犬を飼っているようで、殺処分される動物をゼロにし、その命を幸せにする責任を願ったもので、充実した作品でした。

片野拓実さんの「わすれられないおくりもの」は感動的でした。年をとったアナグマの死を本当に理解できたのは彼の祖父の亡くなった三年後だったというのです。胸がいっぱいになりました。

一年生の佐野隼さんの「ちからをあわせよう」には驚きましたね。一年生でこれだけ書けるとは。ひらがなで一生懸命書いていました。

くれるし、鷲尾裕二さんの作品は郷土三重の鉄道が今日の姿になるまでの経緯を教えてくれる。他にも、上原勝代さんや塚田盛久さん、上田利栄子さんなどの作品も魅力的だったが、選外とせざるを得なかった。ぜひとも捲土重来を期待したい。

藤田萌生さんの「独とくすぎる私の本の読み方」は、実にユニークな読み方をするのに感心しました。

その他、選者共通に得点のあった高嶋梅葉さん、中村友海さん、中村羽花さんががんばっていました。

中学生の最優秀賞は寺西乃絵さんの「私の開拓本」になりました。ミステリーを避けがかった彼女に新たな土地、つまり世界を開拓してくれた本に感謝するのです。木村好花さんの「私の本棚」の本の並べ方も面白かったし、好きな本が並んだ本棚を眺めるのが大好きという思いに共感しました。今は断捨離しなければという私も、そのような青春がありましたよ。

名和佑花さんの「あずかりやさん」は未知の本でしたが、あなたの意見に教えられたような気がしました。

高橋朋子さんの「読む時間」も

私が教えられることがいっぱいでしたよ。

さてベテランぞろいの成人の部は世代的にも近いこともあって、共感を呼びました。

最優秀賞に選んだ谷口訓子さんは昨年優秀賞を取られましたが、作品の確かさは言うまでもありません。「鳳仙花のうた」の歌人を、以前、私も作品を通して知っており、再確認する思いでした。

松本康さんからも教えられることが多く、本当によく勉強されている姿勢に感動しました。

奥田かなえさんも過去に何回か、入賞されていますが、彼女は読書会という行動とともに「万葉集」を読み込んでいるところがすばらしいと思いましたね。

鷲尾裕二さんの「近鉄創世記」は四日市に生まれ育った筆者の貴重な作品で、郷土性を高く評価しました。

過去に入賞された塚田盛久さんや的場大地さん、園田信子さん、青木偉聖さんや多くの人々たちを割愛せざるをえなかったことが残念です。また、高校生の入賞がなく残念でした。高校生の応募を期待しています。

読書に関するエッセー
入賞作品集 二〇一九

令和元年十二月発行
発行 四日市市教育委員会
編集 四日市市立図書館